

製造現場とアート融合



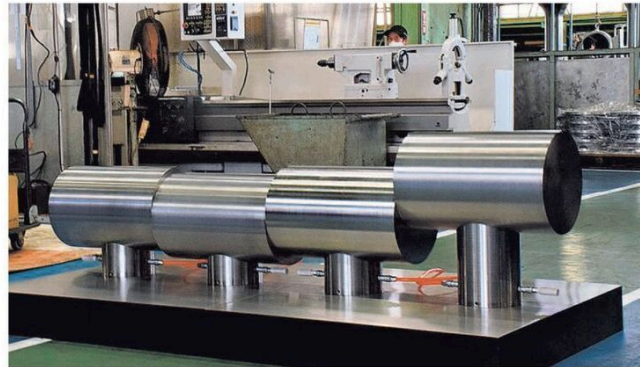
大型蓄電池組立工場に設置したアート作品を紹介する伊藤社長

瀬戸内産業芸術祭モニターツアー



玉野 ものづくり現場とアートを融合し、地場産業の新たな魅力を発信する観光プロジェクト「瀬戸内産業芸術祭」。来年の初開催に先駆け29日に玉野市で始まったモニターツアーでは、地域で培われてきた製造業の伝統と未来を体感できる芸術作品が並んだ。（高橋由大）

ナイカイ塩業で塩水を煮詰めて結晶化する施設の説明を聞く参加者。産業芸術祭ではものづくり現場も見学できる



宮原製作所に設置された鋼材のいす作品。船舶用エンジンのピストン製造で培った高精度な加工技術をアピールする



取材に応じる（左から）大倉明玉野市産業振興部長、金子修久中国運輸局長、宮原社長、大内部長、伊藤社長

ベンチャー企業パワイクイ塩業の本社工場（同市胸上）は高純度の塩を使ったインスタレーションなどを披露した100を超え、社員が生産現場もライトが、温かな光を生み出すインスタレーション（空間芸術）を用意。点滅を繰り返すライトは電源の不安定さを示し、伊藤正裕社長が「われわれが作る蓄電池は滞りなく電力が続くための『調整力』だ」と解説した。江戸期に創業したナ

ジン部品製造の宮原製作所（同市宇野）は精巧な加工技術で仕上げた鋼材のいすを設置。参加者は圧縮空気ですり下動する仕掛けや、工場の様子も楽しんだ。取材に応じたパワイクイ塩業の大内雄一郎管理部長は「新しい視点で工程を見詰め直すことができて新鮮」、宮原製作所の宮原浩光社長は「製品は一般の人の目に触れないので、『すごい』と言ってもらえて社員も喜んでいる」と話した。